令和４年度学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立七尾高等学校

１　豊かな人間性と国際性の育成

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
・学校行事、生徒会活動や部活動等あらゆる活動を通して、多様な他者と協働しながら目標に向かって挑戦し、課題解決ができる力を育成する。	・生徒一人ひとりが一日一善の精神で、他者に対して小さなボランティアを行う。 ・各部ボランティア活動「校内」「地域貢献」（随時）	【成果指標】（生徒） 一日一善運動や校内・地域貢献ボランティアを通して、「感謝・思いやり・協力」の心が育ったことを実感できる。	一日一善運動や校内・地域貢献ボランティアを通して、「感謝・思いやり・協力」の心が育ったことを「実感できる」・「やや実感できる」と答える生徒の割合の合計が Ａ　８５％以上 Ｂ　７５％以上 Ｃ　６５％以上 Ｄ　６５％未満	【１２月実施学校評価アンケート】 〈生徒〉 Ｂ ７７．６％	【判断基準】Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。 【分析】部活動単位で実施しているボランティア活動をとおして、誰かの役に立てる喜びを実感できたとともに他者への感謝の気持ちが育っているものと考える。 【今後の取組】校内ボランティアの経験を活かして、活動の輪をさらに広げる。そのためにボランティア情報の収集や周知に努めるとともに、生徒会を中心に生徒の主体性を育む取組を進める。
・異文化を理解しながら、ふるさとに愛着と誇りを持ち、グローバル、ローカルそれぞれの視点で社会に貢献する資質と態度を育成する。	・「能登の里山里海」特別講座（１年） ・令和４年度ふるさとに学ぶクリエイティブ人材育成事業（２年）	【成果指標】（生徒） 「ふるさとの良さを知り、ふるさとに対する誇りと愛着を実感できている」と評価した生徒の割合が高まっている。	４月に比べると、ふるさとの文化、産業、地域で活躍する人達を知り、ふるさとに誇りと愛着を「実感できた」・「やや実感できた」と答える生徒の割合の合計が Ａ　８０％以上 Ｂ　７５％以上 Ｃ　７０％以上 Ｄ　７０％未満	【１２月実施学校評価アンケート】 〈生徒〉 Ｂ ７７．６％	【判断基準】Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。 【分析】前回より５ポイント以上の改善が見られた。クリエイティブ人材育成事業に係る取組や外部講師を招いての各種講演会の実施によって、生徒の理解や関心が深まったものと考える。 【今後の取組】探究活動をとおして、グローバルとローカル双方の視点から地元の課題を発見し、解決に向けて考える姿勢を育成する。
	・異文化交流 ・外務省高校生講座	【成果指標】（生徒） 「異文化について理解し、さらに学びたいという意欲が湧いた」と評価した生徒の割合が高まっている。	４月に比べると、異文化について理解し、さらに学びたいという意欲が「湧いた」・「やや湧いた」と答える生徒の割合の合計が Ａ　８０％以上 Ｂ　７０％以上 Ｃ　６０％以上 Ｄ　６０％未満	【１２月実施学校評価アンケート】 〈生徒〉 Ａ ８２．１％	【判断基準】Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。 【分析】留学生との交流や JICA 北陸の職員の講演会など、異文化について考える機会が増えたことが、生徒の興味関心を高めたと考える。 【今後の取組】留学生との交流事業であるエンパワーメントプログラムやイングリッシュスピーチフェスティバルでの発表などをとおして、英語力やコミュニケーション能力の向上だけにとどまらない、文化や価値観の違いを踏まえた異文化理解を促進する。

学校関係者評価委員の評価	コロナ禍でありながら、できることを見つけ工夫しながら目標達成に向けて尽力されていることを評価する。
評価結果を踏まえた今後の改善方策	今後、挨拶指導や校歌指導など、コロナ禍で中断せざるを得なかった取組を再開するとともに、ボランティア活動など、学校外の活動を増やしていく。

２　進路志望実現のための学力の形成

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
・基礎学力の定着を着実に進めるとともに、探究型学習を推進して困難な課題と向き合い考え抜く、粘り強い思考力を育成する。 ・生徒の可能性を最大限に引き出し、大学入試制度の変化にも対応できる進路指導を実践する。	・志を貫くためのキャリア教育 ・キャリア教育講演会 ・全国模試の校内採点による早期弱点指導の徹底 ・学習時間調査 ・ホーム担任、教科担当者、部顧問による個人面談 ・進路情報の発信 ・進路講演会 ・難関大学入試問題解法研究 ・金沢大学入試問題解法研究 ・習熟度別学習指導（週末課題） ・スーパー難関大学と難関大学別の講座や個別添削指導 ・金沢大学による出張講座 ・保護者への進路説明会 ・学習計画の作成とチェック ・志望校群別検討会（２年） ・志望校検討会（３年） ・出願校検討会（３年） ・志望理由書の作成（１・２年） ・批判的思考力育成 ・放課後学習会	【成果指標】 （生徒学年別） 第１志望に対して明確な理由がある。	高校卒業後について自分の言葉で語ることができると答えた生徒の割合が各学年目標に対して Ａ　１００％以上 Ｂ　８０％以上 Ｃ　８０％未満	【１２月実施学校評価アンケート】 ＜生徒：１年生＞ Ｃ ３６．７％ ＜生徒：２年生＞ Ｃ ３２．９％ ＜生徒：３年生＞ Ｃ ５６．９％	【判断基準】各学年目標 １年１２０人（６割） ２年１４０人（７割） ３年１６０人（８割） Ｃの場合は改善策を検討する。 【分析】目標には届かないものの、２年生は前回 39 名から今回 46 名、３年生は前回 64 名から今回 91 名と大きく改善した。学年で進めているキャリア学習や進路学習の成果とあわせ、夏以降保護者向けに進路説明会を実施したことが、将来について各家庭で考える契機になった。 【改善策】自らのキャリアについて、生徒に語らせることで気づきを促し、主体的に考えさせる取組を今後も継続する。また、その過程や成果を保護者と共有し、学校と保護者の連携のもとで、生徒のキャリア学習を支援する仕組みを取り入れる。
		【成果指標】 （１年生生徒） 学習習慣を身につけ、学力を向上させている。	（進研模試７月と１月の３教科総合偏差値の比較） 入学後、学力を伸ばした生徒が Ａ　１６０人以上 Ｂ　１３０人以上 Ｃ　１３０人未満	【進研模試７月と１月で３教科総合偏差値を伸ばした生徒】 ＜生徒：１年生＞ Ｂ	【判断基準】Ｃの場合は改善策を検討する。 【分析】成績上位層（GTZ で A2 以上）の人数は入学当初から増え続け、下位層は減り続けている。さらに成績を伸ばすためには、個々の課題を克服するための主体的な行動を促すことが求められる。 【今後の対応】マンダラートと呼ばれる目標達成シートを利用し、自分軸を構築させる取組を行い、目標達成させるためのスモールステップを考えさせ、実践につなげる。
		【成果指標】 （１年生生徒） 着実に学力を向上させている。 （進研模試１月）	１月進研模試での学力到達度（ＧＴＺ）のＳランクの生徒が Ａ　３５人以上 Ｂ　２５人以上 Ｃ　２５人未満	【１月進研模試３教科総合での学力到達度（ＧＴＺ）】 ＜生徒：１年生＞ Ｃ	【判断基準】Ｃの場合は改善策を検討する。 【分析】上位の生徒であっても３教科バランスよく得点できている生徒が少ない。 【今後の対応】１月より上位者指導を国数英の３教科で実施する。単に難しい問題に取り組むだけでなく、２年次での指導を見通したプログラムで実施する。
		【成果指標】 （２年生生徒） 着実に学力を向上させている。 （進研模試７月と１月の３教科総合偏差値の比較）	２年次に、学力を伸ばした生徒が Ａ　１６０人以上 Ｂ　１３０人以上 Ｃ　１３０人未満	【進研模試７月と１月で３教科総合偏差値を伸ばした生徒】 ＜生徒：２年生＞ Ｃ	【判断基準】Ｃの場合は改善策を検討する。 【分析】偏差値帯で６５以上が増加したが、５０台以降はあまり変動しなかった。学年全体として学習時間を十分伸ばすことができず、基礎基本を定着できていない生徒がいる。 【改善策】学習習慣を改善すべき生徒に「学習時間管理シート」を活用し、生活時間を含めた毎日を振り返ることにより、学習時間を確保できるように生活習慣の改善を促す。

		【成果指標】 （２年生生徒） 着実に学力を向上させている。 （進研模試１月）	１月進研模試３教科総合で学力到達度（ＧＴＺ）のＳランクの生徒が Ａ　３５人以上 Ｂ　２５人以上 Ｃ　２５人未満	【１月進研模試３教科総合での学力到達度（ＧＴＺ）】 ＜生徒：２年生＞ Ｃ	【判断基準】Ｃの場合は改善策を検討する。 【分析】7 月→1 月の S 層の変化について、3 教科総合で 15 人→20 人で増加した。数学で 19 人→26 人、英語で 12 人→16 人と増加したが、国語で 22 人→16 人と減少した。基礎力をつけても、難度の高い思考力を要する問いに対応できていない。 【改善策】ブロック大志望者集会を行い、A ランク層の学習意欲高揚を図る。ハイレベル模試を活用した特別講座を早期に実施し、読解力・思考力を育成する。
		【成果指標】 （３年生生徒） 生徒個々の志望大学に合格している。 ＊スーパー難関大学とは、東大・京大・国公立大医学科を指す。	スーパー難関大学の合格者が Ａ　５人以上 Ｂ　３人以上 Ｃ　３人未満 難関大学１０大学の合格者数が Ａ　２５人以上 Ｂ　２０人以上 Ｃ　２０人未満 金沢大学の合格者数が Ａ　３５人以上 Ｂ　２５人以上 Ｃ　２５人未満 国公立大学の合格者数が Ａ　１４０人以上 Ｂ　１２０人以上 Ｃ　１２０人未満	【大学入試結果】 ＜生徒：３年生＞ スーパー難関大学 Ａ 難関 10 大学 Ｃ 金沢大学 Ｂ 国公立大学 Ｂ	【判定基準】大学入試結果で判定する。 Ｃの場合は改善策を検討する。 【分析】 国公立大学前期試験の合格率は 8 割を超えた。そのうち、難関 10 大学の合格率は 7 割を超え、金沢大の合格率は 9 割を超えた。出願の際の 3 年担任の熱意をもった指導が功を奏した。 【今後の対応】 ・低学年次指導を一層充実させる必要がある。3 年夏までに必要な知識･技能を定着させるための学習指導計画を再考する。 ・金沢大学の KUGS 特別入試の分析・検討を行う。 ・授業の効果をより高めるという視点で、各教科での授業改善を推進する。
学校関係者評価委員の評価		日頃より、丁寧な学習指導が行われていることを評価する。今後も、学びの質を向上させていただきたい。			
評価結果を踏まえた今後の改善方策		主体的な学びにつなげる指導を行うため、探究活動を通して身に付けた「探究のサイクル」を他教科でも指導に活用する。また、一人一台端末を活用した主体的・対話的で深い学びを実現するため、学校内外の研修会を積極的に活用する。			

３　教員の総合的な指導力の育成

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
・生徒理解に努め、共感力と生徒支援力の向上を図るとともに、人間としての在り方・生き方を育む指導力を高める。 ・教職の専門性を基礎とし、教科指導力や学級経営力、危機管理力などの実践的な指導力の向上に努める。 ・校内でのＯＪＴによる若手研修を、中堅・ベテラン教員の経験を活かしながら効果的に進め、教職員全体の指導力向上を図る。	・スマートフォン、携帯電話等によるインターネットトラブル（いじめを含む）に関する校内講習会の実施と、新しいトラブル対策ための資料の作成と配付 ・生徒会によるネットトラブル防止啓発活動の企画・実施	【成果指標】 （生徒） スマートフォン等によるインターネットトラブルに対する、安全・予防対策を実践している生徒の割合が高まっている。	スマートフォン等によるインターネットトラブルに対する安全・予防対策を、「十分に実践している」・「やや実践している」と答えた生徒の割合の合計が Ａ　９５％以上 Ｂ　９０％以上 Ｃ　８５％以上 Ｄ　８５％未満	【１２月実施学校評価アンケート】 ＜生徒＞ Ｂ ９３．１％	【判断基準】Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。 【分析】ＳＮＳなどのネットトラブルは誰にでも起きうるものであるという認識が、ほとんどの生徒に浸透している様子である。 【今後の取組】一人一台端末の活用が進むなか、適切な使用ルールやマナーについて生徒自身が考えて実践できるよう支援する。
	・「生徒による授業評価」の結果に基づく授業改善の推進 ・学習到達度に応じた予習・復習の取り組み方法の提示 ・Ｇｏｏｇｌｅ　ｃｌａｓｓｒｏｏｍを活用した復習内容の提示 ・予習チェックの呼びかけ ・「効果的な予習を促す」指導及び「多様な見方考え方が身につく」指導に関する教科内及び教科間での研究と情報共有 ・批判的思考力育成課題「知のよりみち」の更なる活用を図るために編集を工夫	【成果指標】 （生徒） 国語・数学・英語において「私は授業の準備をして授業に臨んでいる」と評価した生徒の割合が高まる。	国語・数学・英語における「私は授業の準備をして授業に臨んでいる」と評価した生徒の割合が Ａ　７０％以上 Ｂ　６５％以上 Ｃ　６０％以上 Ｄ　６０％未満	【１２月実施第２回生徒による授業評価】 Ｄ ４８．６％	【判断基準】Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。 【分析】前回よりも大きく減少した。スマホ利用の時間が増加しており、このことが家庭学習時間を圧迫しているという実態がある。また、予習復習に取り組ませる指導が十分ではない。 【改善策】生徒課と連携し、スマートフォン利用についての指導を継続的に行い、予習復習に取り組ませる指導を徹底する。また、生徒の到達度に応じて予習・復習の方法を具体的に指示したうえで、指導と点検を粘り強く継続する。
		【成果指標】 （生徒） 「多様な見方考え方が身につく」と評価した生徒の割合が高まる。	「多様な見方考え方が身につく」と評価した生徒の割合が Ａ　６５％以上 Ｂ　６０％以上 Ｃ　５５％以上 Ｄ　５５％未満	【１２月実施第２回生徒による授業評価】 Ｃ ５７．０％	【判断基準】Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。 【分析】前回から大きな改善は見られない。習得・活用・探究という学びの過程を授業のなかで意識的に位置づけて、生徒の主体的な学びを促すよう授業改善を進めていく必要がある。 【改善策】本校オリジナル教材『知のよりみち』を使った活動で経験したものの見方や考え方、教科『探究』で身に付けた探究的手法を、授業のなかで活用させる取組について、各教科で検討する。

・GIGA スクール構想の実現に向けて、教員の ICT 活用指導力を高めることによって生徒の学びの変容を促す。	学年・教科を主体としたＯＪＴによる若手教員育成を推進する。	【成果指標】 （若手教員） ＯＪＴをとおして教員としての成長を実感できる。	ＯＪＴにより「教員としての成長を実感できた」・「ややできた」と答えた若手教員の割合が、 Ａ　９５％以上 Ｂ　９０％以上 Ｃ　８５％以上 Ｄ　８５％未満	【１２月実施学校評価アンケート】 ＜教員＞ Ｄ ８０.０％	【判断基準】Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。 【分析】目標には届かないものの前回よりも改善され、15 ポイントの増加が見られた。ＯＪＴをとおして充実感や達成感が得られているものと考える。 【改善策】互見授業や授業研究・教科会議をとおして、常に若手教員が授業力を磨いていける環境を整えるとともに、ベテラン教員の指導技術継承を促す仕組みを検討する。
	情報課やICT支援員とも協力し、学校を挙げて GIGA スクール構想を推進する。	【成果指標】 （教員） Chromebook を活用して、生徒の主体的で深い学びを促すよう実践している。	「Chromebook を活用して、生徒の主体的で深い学びを促すよう実践している」に、「あてはまる」「ややあてはまる」と答えた教員の割合が、 Ａ　７０％以上 Ｂ　６０％以上 Ｃ　５０％以上 Ｄ　５０％未満	【１２月実施学校評価アンケート】 ＜教員＞ Ａ ７８.７％	【判断基準】Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。 【分析】生徒一人一人が授業中に Chromebook を活用する場面が増えている。とりわけロイロノートなどクラウドシステムの活用により、情報や思考を共有し、双方向のやり取りができるようになったことで、より対話的で深い学びが可能になった。 【今後の取組】情報課や ICT 支援員を中心に、校内外の優れた実践例を共有し、互見授業や教科会議を通して Chromebook を活用した授業研究を推し進める。
学校関係者評価委員の評価	ICT 機器を活用した授業実践に取り組んでいることは評価するが、準備をして授業に臨む生徒の割合が５０％を下回っている点は、改善する必要がある。				
評価結果を踏まえた今後の改善方策	スマートフォンの利用に関する指導を通して、使用時間を減少させるとともに、予習・復習の具体的な方法やその意義と必要性を繰り返し指導する。				

４　魅力ある学校づくり

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
・特色ある教育活動（第5期 SSH 事業、NSH 事業）を全校的に推進し、その成果の全国的な普及に努める。また、その活動・成果を地域の小中学	学校設定教科「探究」の成果物等の他校への普及	【成果指標】 本校の開発した教材を提供し、県内外の他校（中学校を含む）に成果の普及を図っている。	本校の開発教材を使用した学校数が Ａ　２０校以上 Ｂ　１５校以上 Ｃ　１０校以上 Ｄ　　５校未満	【成果指標】 Ｄ	【判断基準】Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。 【分析】SSH のＶ期指定を受けたことで、全国からの学校視察が相次ぎ、そのつど本校の開発教材を提供した。さらに探究に関する公開授業にも他校から多くの教員が参加しており、成果の普及ができていると考える。また、ホームページ上のワークシートや探究パッケージのダウンロード数も着実に伸びており、200 回を超えている教材もある。しかしながら教材の活用実態は把握できていない。 【改善策】ホームページ等をとおして成果の周知を図るとともに、ダウンロードできる教材をさらに充実させて、研究成果の普及を図る。

生に広報し、本校の魅力として伝える。	物理チャレンジ、化学グランプリ、生物学オリンピック、数学オリンピック、全国総合文化祭等の全国規模の各種大会やコンテストへの出場者の育成	【成果指標】 （生徒） 全国大会相当への出場の決定数が増えている。	全国大会相当への出場が決定した個人またはグループ数が A　４以上 B　３ C　２ D　１以下	【成果指標】 ＜生徒＞ A	【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。 【分析】「高校生バイオサミット in 鶴岡」に研究１件、「物理チャレンジ全国大会」に１名が出場した。また、来年度の全国総文自然科学部門に４件の出場が決定した。学会や各種発表会、論文コンテストへの参加も増えている。 【今後の取組】オンラインでの発表が増えているため参加しやすい状況であり、引き続き、学会等の学外の発表会に積極的に参加する。今後は理数科や文系フロンティアコースの課題研究だけでなく、融合プロジェクトの研究についても適当な発表会、コンテストへの応募を検討する。
	・英語に関するコンテスト（スピーチ、ディベート、エッセイ、暗唱、劇など）、弁論大会、その他課題研究コンテスト等への参加や応募の促進 ・進路達成を見据えた指導体制の構築	【成果指標】 （生徒） 左記の大会やコンテストに参加し、実績を上げている。	左記大会やコンテストに参加し A　優勝を含む入賞４件以上 B　入賞　３件 C　入賞　２件 D　入賞　２件未満	【成果指標】 ＜生徒＞ B	【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。 【分析】探究甲子園の中止などコンテストの数は減ったものの、部活動などの課外活動で３件入賞があった。 【今後の取組】探究に関わる発表やコンテストなどに、準備の時間なども見据えて、生徒に提示し、出展数を増やしていく。
	生徒の実用英語技能検定の取得数が、１年生は準２級以上、２年生は２級以上が増加すること。	【成果指標】 （生徒） 左記の検定合格者数が増加している。	左記検定における各級の合格者数が合計で A　９０人以上 B　８０人以上 C　７０人以上 D　７０人以下	【成果指標】 ＜生徒＞ D	【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。 【分析】金沢大学では英検のスコアを得点換算する入試制度をとっているが、そのスコアは入試の２年以内のものに限るという規定があり、そのことが１年時に英検を受ける動機づけを弱くしている実情がある。 【改善策】英検を英語のパフォーマンス力を確認するテストとして位置づけることも検討する。
学校関係者評価委員の評価	ホームページ上に、SSH のワークシートや探究パッケージが掲載されている点は評価するが、更新されていないページがある。				
評価結果を踏まえた今後の改善方策	ホームページを精査し、不要なページは削除し、新しい情報を積極的に掲載するよう、こまめな更新を心がける。				

５　働き方改革の推進

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
・教職員は、ワークライフバランスやタイムマネジメントを意識しながら不断に業務改善を進め、教育活動の質的向上に努める。	・月２回の定時退校日と８月の閉校日を設ける。 ・最終退校時刻を意識して計画的に業務に取り組む。 ・長期休業中にまとまった休暇を取得する。 ・年休を計画的に取得する。 ・会議のペーパーレス化をさらに進めるとともに、効率的・効果的な会議運営を行う。 ・情報共有の仕方を工夫し、職員朝礼を原則として週に１回とする。 ・業務の平準化を図り、分業と協業の体制をつくる。 ・部活動の休養日を適切にとる。	【成果指標】 （教員） 業務の工夫・改善により効率化を図る。	業務の工夫・改善により効率化を「図ることができた」・「やや図ることができた」と答えた教員の割合が Ａ　９０％以上 Ｂ　８０％以上 Ｃ　７０％以上 Ｄ　７０％未満	【１２月実施学校評価アンケート】 ＜教員＞ Ｃ	【判断基準】Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。 【分析】会議時間の短縮が進んでいることなどもあり、前回より大きく改善した。とりわけホーム担任や主任を中心に業務効率化が図られている様子が窺える。一方、クラス数の減少にともなって職員数も減っており、一部で業務量の偏りも見られる。 【改善策】ＩＣＴ技術の活用によりテストの採点やアンケート集計、会議などでは省力化を図ることができている。また、ロイロノートなどの活用により、紙媒体を用いないで手軽に課題提出等が行えるようになった。こうした技術の活用が業務効率化になっており、全職員が活用できるよう支援し、他の業務にも活用していく。
学校関係者評価委員の評価	ICT 機器などを活用し、働き方改革が進められている点は評価できるが、さらなる改善を進めてほしい。				
評価結果を踏まえた今後の改善方策	継続して研修会や互見授業を通して ICT 活用スキルを高め、効率化を進める。また、事業の目的・ねらいを精査し、事業のスリム化を図っていく。				